

ことばの異常な子どもの指導

どもりの子ども

(2)

田 口 恒 夫

いわゆる一次性どもりの状態にある子どもに対して、私どもがこなっている指導のしかたを、箇條書きにしてみよう。根本方針は、二次性どもりに移行するのを「予防」することにあります。

へ一般的な指導へ

一、からだ

まず、小児科的な病気や、鼻やのどの病気があれば、その治療をうけさせる。

休養と睡眠がたっぷりとれるように工夫する。場合によっては、小児科医と相談して多量のビタミンBをのませたり、鎮静剤を与えたりすることもある。

二、しつけ

ふつうの子どもと同じにする。すべて、ふつうの子どもにとってよいことは、どもりの子どもにとっても、よいことであるから。望ましい行動に対しては、うんとほめ、はげましてあげる。望ましく

ない行動は、できるだけ無視するようにする。

三、ふんいき

家庭のふんいきを、和やかなものにする。子どもが気を使わなければならないような、家庭内の問題は、おとながよく相談して解決しておくようにつとめる。

四、長所をのばす

子どもの悪い面から眼を転じて、よい面を探す。悪い面のことへ気にするのを最小限にして、長所に対してじゅうぶん注意を払い、大いに認めて励ましてやる。

なにか新しい遊びかたや技術をおぼえさせるとか、草花や動物の世話をさせるとか、物を作る喜びを味わわせるなど、新しい興味や関心を育てるのもよい。

五、ともだち

できれば友だち関係の調整を考えてやり、よくグループに加われるように配慮する。もちろん、仲間としては、寛容な性質をもった

子どもが望ましい。

へコトバの指導へ

前にも述べたように、どもりについては、ほんとうの原因もよくわかっていませんし、特效薬のような治療法ありません。ところが、いわゆる「矯正技術」については、たくさんの方が宣伝されています。そして、困ったことに、これらの方法のうちのいくつかは、とても危険なのです。うっかりこれを一次性どもりの子どもに適用すると、一挙に、二次性どもりの状態に追い込んでしまう結果になることがあります。二次性どもりに追い込むくらいなら、いまのままの方がましです。

一般的に、「コトバ」そのものや、「どもること」を、子どもに意識させるような方法は、危険です。はずかしめたり、おとしことばを使ったりすることは禁物です。どもらないようにするための、なにか不自然な「コツ」のようなものを教えることも、なるべく避けるべきです。

比較的效果があり、しかも安全な指導法として知られているのが、次のような方法です。

一、まず経験の分析をする

母親に観察記録をつけさせる。どういう時にどもり、どういう時にひどく、どういう時に軽く、どういう時にどもらなかったかを細かく観察させる。たとえば、話している途中だれかにさえぎられた

とき・先を争って話していた時・むつかしい内容のことを話そうとしていた時・なかに夢中だったとき・言いわけのことばに困ったときなどというように。そして、それぞれの場面や状態におけるどもり方を記録する。

これによって始めて、子どものどもりの実態が親の眼にもはっきりしてきて、かえって安心することもある。

二、たくさん話させる

分析の結果にもとづいて、調子のよさそうな場面ではできるだけ心ゆくばかり、たくさん、話させてあげるように配慮をする。分析の結果からみて、調子の悪そうな場面では、これと反対にあまり話さなくてもいいような配慮をしてやる。

どんなどもりの人でも、同じ文章を五回続けて読むと、第五回目にはどもる回数において平均して第一回目の半分しかどもらないという事実が知られている。

どんなにどもっても、よく喋る子どもの方が、だまり込んでしまう子どもよりは、ずっとタチがよいわけである。

できるだけ調子のよさそうな場面を用意して、できるだけたくさん話させるということは、原則的に最も大切な方針である。

三、話すことに自信をもたせる

いろいろの工夫がある。そのひとつは、心理的な圧迫や責任の少ない雰囲気を用意することで、遊戯療法や、サイコ・ドラマなどの心理療法を活用すること。もうひとつは、何人かのほかの人といっ

しよに、同じ歌を同時に歌うとか同じことばを同時にとなえる（齊唱）とか、または同じ文を音読させる（一齊読）とかいうようにして、正常な発声や発音の様式を、それとなく身につけさせる方法である。ふしぎなことに、どんなにひどい子どもの子でも、齊唱や一齊読でどる子どもはめったにいない。

こういう方法を使って、気楽な雰囲気で、連続三十分ないし一時間、思う存分声を出させ、たくさん表現させるのは、たいへん効果的である。

四、どもつても聴いてやる

子どもがどもったとき、聴き手の方がそれを気にして顔色を変えたり、感情的な反応をしたりするのは、たいへんよくない。

子どもが、如何に話した（どもった）か、ということに気をとられずに、何を言おうとしているかという点（話題）だけに注意して、喜んでよく聴き、うけこたえをしてやる。せかしたり、その場で言いなおさせたり、話の腰を折ったりすることはよくない。

どもりはじめたら、どもりの波が通りすぎるまで、一瞬待ってやる心掛けが大切である。

そのすぐあとで、その話題に関係のあるちょっとした楽しい思い出やお話に子どもの注意を惹いて、どもったという記憶が子どもの心に残らないように洗い流してやることも、たいへんよい。

五、話し合いをする

受持ちの先生、近所の口やかましいおばさんたち、家族、子ども

の友だちなどと、機会があればどもりについて話し合っておく。

好奇心をもった友だちなどに対しては「話し方はふつうでないがせきたてたりからかったりしないで、少し待って聴いてやっていれば、よく話せるようになる」と話して、協力してもらうようにする。

子どもについては、説教したり矯正しようとしたりしないで、もっぱら、不満や悩みがあればよく聴いてやることにつとめ、励ましてやる。

六、よい見本を示す

美しい歌や、きれいな話し方の見本になるような、映画や放送劇やレコードなどに接する機会を与えてやる。コワイロを使ったり、まねをしたりして遊ぶのもよい。

子どもに対して話す時も、気分には左右されしないで、落ちついた話し方をするように心掛ける。

七、怖れない態度をつくる

どるけれども、それはそれだけのことで、どうということはないという、広い気持をもたせる。

親や家族や教師が、よく実態を理解し、しっかりした態度をとっていれば、案外むづかしいことではない。どるものがくやしとか。友だちにからかわれたとかいう子どもの報告や、観察に対して、親や教師が感情的な反応をすると、子どもは怖れをいだくようになる。

八、利き手の訓練

利き手が右手か左手かはつきりしない場合に、ほんとうの利き手を決めるのには、神経学的な検査が必要であるが、どちらかに決まったら、利き手の方だけをたくさん使うような訓練をする。とくに、いままで、どちらともつかないでいた場合や、反対側を主に使っていたような場合には、積極的に利き手の訓練をさせてみる。このばあい、両手を同じように使う遊びをむしろ避けて、片手を主に使う遊び（ボール投げ、ハネつきなど）を奨励する。釘打ちなどの宿題を出すこともある。

九、リズム遊び

リズムに合わせて手をたたく、おどる、声を出す、吹く、呼吸をするなどの動作をする遊びを、適当に日常の遊びの中に組入れておこなう。

十、抵抗をつける

おちついた雰囲気で、静かにゆっくり話し合いながら遊んでいて、子どもがどうしても見定めながら、少しずつ場面を変えて心理的な圧力を加えていき、環境の影響に対する抵抗力をつけていく。

心理的な免疫ともいうべき技術で、専門的な経験が必要である。

以上いずれも、なんとなく遠まわしな、歯がゆいような感じの方法ですが、一般的な健全な方法としては、これらが主なものだと思います。

たちどころにどもりを止めてしまう方法は、もちろんほかにもた

くさんあります。また、それを、うまく治療に応用することもできます。しかし、それにはたいへんな危険が伴いますので、よほど馴れた人でないと使えません。

一挙に治してしまうことを望むのは所詮無理なことです。基本方針としては、まず①原因になったかもしれないような、望ましくない諸要因を、できるだけ除き、②二次性どもりに追い込むおそれのあるような因子を、できるだけ調整して取り片づけ、③一次性の状態に留めておいて、その勢が衰えて正常化するのを“待つ”というのが、いまのところでは、一番健全なやり方です。

実際には、ひとりひとりの子どもは、それぞれに違った問題をもっていますので、適切な指導をするためには、その子どもにちょうど合った方法を、ひとりひとりの子どもについて計画することが必要です。

そのために、私どもの施設では、ひどく多方面にわたるいろいろな検査をして、診断の資料にしています。現在の子どもの話しかた、どもりかたの程度、どもることに対する態度、どもりの始まりと経過、コトバの発達の調査などのほか、心理面では、社会性、知能、性格、家族友人関係とくに親子関係などの点をくわしくしらべます。身体的な面では、生育史、医学的な病氣、身体的特徴、くせ、体質、協調運動能力、耳鼻科の病氣、コトバの器官の働らき、利き手の問題などに、とくに注意しています。そして問題の所在と重点に従って、指導方針を立てます。

（国立ろうあ者更生指導所）